
神の選択と抗う絆

鷹崎 弘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の選択と抗う絆

【Nコード】

N7349Z

【作者名】

鷹崎 弘

【あらすじ】

突如隼の前に現れた死神テトラは隼に願った。

世界を救ってほしい、と。

隼は強引にテトラに異世界に転移させられるが、隼はどうすれば世界を救えるのかを教えてもらっていない。

異世界という変わり果てた日常の中で隼は、出会いや別れ、取り留めないことでさえも通して過去のトラウマから抜け出し、変わろうとする。

00 要領の悪い神（前書き）

序章

壊された日常

00 要領の悪い神

その日、全てが変わった。

「うお！！！」

学校から帰宅中の、荒神隼は今日もいつも登下校に使っている道を自転車に乗って一人走っていた。

高校を入学し、隼がこの道を使うようになってから既に三ヶ月が経ち、この道ももう慣れた道と言ってもよい頃となった。

しかし、慣れとは恐ろしいものだった。

隼はいつも通り…いや、この道に慣れたせいもあるのか、注意力が散漫の状態で曲がり角を曲がった。

そして突如、隼の目の前には一台の車が現れた。

車もブレーキを掛けてはいるのだろうが、確実に当たるのが分かった。

隼は反射的に強く目を閉じ、身体を強張らせた。

「……生きてる？」

それが、恐る恐る目を開けた隼の第一声であった。
隼はいつの間にか寝転んでいる状態になっていた。

（車にひかれたけど、当たり所がよかったとか？）

そう考えながら隼は普段通りの力の入れ方で、まず上半身を持ち上げてみた。

「……痛く、ない？」

なぜか隼は全く痛みを感じることなく上半身を持ち上げることができた。

「たしかに、俺は車にひかれた……よな？」

もはや、車にひかれることすら半信半疑の状態であった。

特に、目を閉じていたため、車と衝突した瞬間を見えていないことと、痛みが全く無いことが隼の頭を余計に混乱させている。

「んー………ん？ あれ？ ここどこ？？」

隼は今まで気付かなかったのだが、ふと、辺りを眺めてみると、そこは明らかに先程までいた道路ではなかった。

一番異なっていたことは、自分でも今までどうして気付かなかったのかと思うのだが、隼は今、自身の身体ですらも見えない程の暗闇の中にいたのだった。

「……やっと目が覚めたな。待ちくたびれたぞ。あと5分、目が覚めるのが遅かったら叩き起こすところだったぞ」

不意に、頭上から声が聞こえた。

その声の主は口調こそ男のようだけど、声色は若い女

性のものだった。

「…………誰？」

当たり前の疑問が隼の口からこぼれた。そもそも隼はどうしてここににいるのか、自分でも分かってない。

「そうだな……まあ、私のことはテトラとでも呼ぶといい。確認しておくが、お前の名は荒神隼で間違いないな？」

「え、ええ、そうですけど……どうして俺の名前を？」

そもそもあなたはいつたい……？」

彼女は素早く隼の意を汲み取って、こう話を続けた。

「おっと、呼び方なんてどうでもいいな。私は何者なのか、だな」

「……そうです。あなたは何者なんですか？」

「私は……そうだな……お前達、人間に死神と呼ばれている存在、と言うところかな」

「……え？」

隼は、何を馬鹿なことを言っているんだ、と思いついたが、それ以上に、言い方こそ雑だが、テトラは本気で言っているように感じられた。

「本気で言っています？」

「ああ、本気だとも」

テトラは一瞬たりとも間を空けることなく断言した。

「……………」

「……………」

「…………証拠を見せてもらえませんか？」

「まあ、よいが……その前に堅つ苦しい話し方やめにしないか……昔のことを忘れろとは言わないが、もう少し器用にできないかのか？」

「　っ！！」

テトラのその言葉によって隼の頭の中に昔の記憶が蘇る。
そして、それが彼を覆いつくそうとする。

恐怖によって。

「すうー…はあー…」

隼は大きく深呼吸することによって、どうにか落ち着きを保てた。

「どうしてそのことを知っているのかは、分かりませんが、まず、
証拠を見せてください」

「分かった。分かった。」

「……ふむ。さて、なにをすればお主に認めてもらえるのか…？」
「……」

しばしの沈黙。

そして、テトラが話します。

「よし！」

ならばここで人の理^{ことわり}を越えた力を見せれば、認めてもらえるか？
「……分かりました。本当にそんなことができるのならば、認めま
しょう」

と呆れたように言ったものの、テトラのその自信に溢れた物言いが隼を不安にさせる。

「では、いくぞ…と、その前に隼、頭上をよく見ておけよ」

「わ、分かりました」

隼は、ごくり、と唾を飲み込む。

そして

頭上から一筋の雷が隼に向かって、直撃してきた。

「　っ！！」

当たり前だが、雷は光の速さを持つため、隼がその雷に気付いたのは直撃した後だった。

だが、それが自らに向かって落ちてきたことは認識できた。

また隼の目は暗闇の中にいるせいで分かりにくい、その眩しさによって焦点が微妙に合っていない感覚があった。

「どうだい？ 信じてもらえたかな？」

呆然としている隼にテトラは尋ねた。

「…え？ ああ……いや、少し待ってくださいっ！」

俺は雷に当たったのでは！？」

隼は死んでいない。それどころか、痛みすら感じていなかった。だから、このような質問が出てきたのだ。

「ん？ ああ、今は雷ではないぞ。今はな」

「才能」と言う名の光だ

「……は？」

目が覚めてから、驚くばかりの隼だが、驚くということがはなくなる気配は無かった。

それ以上にもはや聞いたことが間違いだったのでは、と思うようになっている。

「…分かりました。信じることにしましょう」

「助かる」

隼は何とも言い難い思いがあったのだが、一応はテトラのこと認めた。

いや、認めざるをえなかった

「それで？ その死に、が……！！」

隼はテトラを死神だと信じた後になって、ようやく思い出す。事故にあったことを。

「そう、か…俺は死んだってことですか……」

それなら完全に納得…とまではいかないが、わずかに納得できるところがある。

「魂の回収というものですか……」

「いや、違うが」

「えっ…!？」

「……………」

テトラは当然の様に隼の発言を否定した。

隼は恥ずかしいことを真面目に言っただらろうか、顔に熱を感じ、赤くなっているのが分かった。

また、テトラが少し面白がっている気がした。

「な、なら、何が目的なんですか？」

その質問に対してテトラは一拍おいて、真剣な声で話します。

「…私がお前を呼んだ訳は……隼……お前に世界を救ってほしい……」

隼は、もはや何に対して、どう驚べきなのか、自分でも分かっていない。

つい先程、意味の分からない力を見せつけられ、ありえない存在を認めさせられ、とうとう、隼自身に対しても理解できないことを求めてきた。

隼はもう何も言えなかった。

「理解しがたいのは分かる。だが、もはや時は一刻を争うのだ」

私達にもお前にも。

「……………え？俺にも？」

「そうだ。まず、私が言っている『世界』とはお前が思っているよ

うなものではない。」

隼は首を傾げた。

しかしテトラは仕方ない、と言う風に話を続ける。

「お前に分かりやすく言うならば、救ってほしいのは全ての過去、現在、未来。そして全ての平行世界だ」

テトラは真面目な口調で話している。

隼も意味は分かった。

だが、ただそれだけであつた。

「まず、お前にはある地に赴いてもらう必要がある」

「……その前に聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「あの、俺は死んだはずではないのですか？」

隼はテトラの言う『世界』は理解不能とし、一番気になっていたことを聞いた。

「ん？」

ああ、そうだな…そのことについても話さないとならないか…

ふむ、どこから話すべきか…」

隼の額から汗が流れる。緊張しているのだろう。

そして、テトラは再び口を開いた。

「よし、まずはどこに行ってももらうからかな。隼、お前には」

異世界に転移してもらう。

「……………」

「……………」

「……………」

「さて、その異世界とはな」

「ちよっと待ってください!」

「まあ、黙っておれ。まずは私の話を全て聞け」

そのテトラの声は今までと異なり、相手に有無を言わさないものだった。

「……分かりました」

「よい。まず、その世界の名はこちらの世界の言語で言つと『始まりの世界』と言つところか。

そこはな、この世界で言う神話の世界なのだ。

いや、そもそもいくつかの神話はもともと、あちらの世界での実際の出来事だ。それが空間の歪みによってこの世界に投影され、伝わっていった。

そんな、お前達の世界ではありえない闘いの世界こそが『始まりの世界』というわけだ」

（………これはどう反応すればいいのだろうか？）

隼は黙っておくように言われたため、一人心中でそう思っていた。

「次にお前がそこに行かなければならない訳なのだが……

いや、その前にあちらの世界の現状を話そうか」

（何か深刻そうだな……）

テトラの声は最初に会話した時のものとは明らかに雰囲気は異なり、今は深刻そうに語っている。

「今、あちらの人間は神々と戦争をしている……いや、違うな……そう、神の干渉から逃れた、と言えば分かるか？」

（………分かりません……）

むしろ分かる人なんているのだろうか、とも思っていた。

「神はいる。その事を頭に入れて聞くがよい。

それで神って存在は世界の管理をしている。基本的に人間からの干渉は出来ないのだが、あちらの世界の人間は神を人間界に引きずりおろして……殺した」

(……それはどのくらい凄いことなんだ?)

「神はな、人間界だと本来の力の百分の一の力も出せない。人間も水中で走れることは難しいだろ？」

それと同じだ。神とて人間界では闘いにくい。おまけに人間は神を強制召喚させる際に、さらに百分の一の力しか出せなくする結果を張った。要は一万分の一の力も神は出せない。そして、殺された」
テトラ自身も死「神」のはずなのだが、同じ「神」が死んだことを全く気にしていないかの様に話した。

(……人間もやるなあ……)

それに対して隼は感心していたのだった。

「下級神が殺されるところまでは別に上位の神々は気にしていなかったのだが、その後、人間はとうとう中級神まで殺してしまった。そして上位の神々……上級神以上が人間を危険視し始めた。

だがな、神が自ら人間界に降りることは神々のシステム上問題があった。だから神は『人間』を使うことにした」

テトラは大事なこともスラリと、会話の流れで言った。

「は？」

それはどういうことですかっ!？」

今まで我慢していたが、とうとう隼は声を出してしまった。

しかし、テトラも特に気にする様子もなく話を続けた。

「他の世界の人間をあちらの世界に潜り込ませ、滅ぼさせるために、

だ。ただ、リスクも大きかった。世界を渡ることの成功率は一パーセント未満。

そして失敗したら魂は……消える……」

テトラは重そうに語るものの、隼には魂という物がよく分からなかったため、テトラに尋ねた。

「魂が消えると、どうなるのですか？」

「…一つの魂が消えることで数万の人間が…消える…」

「??」

待ってください。どうして魂一つで数万人もの人間が消えるのですか!？」

「…世界つてもものはな、神ですら幾つあるのか分からないだよ。

例えば神の上の神、その上の神、と可能性の話をしたらきりがないことがある。

同様にそれが積み重なり、私達ですら知らない世界がある可能性もある。そして魂は一人一つではない。世界を越えて繋がっているだからなんだ…」

「なら、どうして死神が俺に接触してきたんですか？」

一度話したら止まらない。だが、テトラも怒ることはなかった。

黙っていた意味はあったのだろうか、とさえ思えた。

そして、今の隼の発言。気がつくとう隼は何気なくテトラのことを死神と言っていた。

隼はいつの間にか疑いが完全に消え、テトラを死神と認識したようだった。

「うむ。それでなその魂の消滅のせいで世界のシステムが壊れ、世

界が滅んだ。それも既に数百は越えている」

「えっと、その神々のシステムとか世界のシステムって」

何なんですか？

そう聞こうとしたが、できなかった。

テトラの声が隼の声を遮る。

なぜなら、

「なっ　！！」

くそっ！もう時間が無い。今すぐあちらに送るぞ！！」

急にテトラが焦りはじめたからだ。

「え？　えっ！？　それって魂が消え」

「大丈夫だ。そのための『才能』をお前に与えておる。あちらの言語も頭の中に突っ込んである。だから頼むぞ。

世界を救ってくれ」

「ちよっと待」

そして隼は意識を失った。

…ただ、彼には意識を失う前に言いたいことが一つあった。

だから、結局何をすればいいのですかっ！！？

そう…テトラは隼に「世界を救ってくれ」とは言ったものの、何

をどうすればよいのか、という点については一切教えていなかったのだ。

01 異世界（前書き）

第一章

異世界突入編

01 異世界

「……んっ……ん」

荒神隼は何か生暖かい物にぺろり、と頬を舐められた様な感覚と共に目を覚ました。

「ここは……？」

まだ意識がはつきりとしていない中、隼は周りの状況を確認しようと辺りを見渡した。

そこは見渡す限り木しかなかった。密林地帯とも言つのだろうか。そんな場所だった。

そして隼の隣には彼が今まで見たこともない生物がいた。

(…コイツは犬か？ 犬なのか？

見たところ、ここは山か森の中なんだろうけど、この犬っぽいのは何だ？？)

そう考えていると、隼はようやく思い出した。

テトラに異世界に送られたことを。

「ここが異世界、か…」

隼は感慨に浸る、というわけではない。むしろ本当に異世界なのか、どうか疑っていたくらいである。

隼は隣にいる生物の頭を撫でながら、呟く。

「はぁ…結局俺は何をすればいいんだろ…そもそも何で俺なんだ？ 才能の光ってなんなんだよ？」

…いや、その前に必要なことは何も言われてないよな……」

そして、隼がぼんやりとそう呟いていると、先程の生物が隼の足に頬をすりつけてきた。

その生物の身体の大きさはまるでチワワの様に小さく、隼は何も知らないが、たぶん何かの子供だろうなと思った。

この大きさと大人という可能性もあるのだが…

その全身の太さはチワワより断然太く、体毛は真っ白な毛できれいに整っていた。

だが、顔つきが少しおかしい。

確かにかわいらしいのだが、犬とトカゲを合わせた様な顔つきをしている。

「きゅ〜？」

その生物は、まだ鳴きながら隼の足に頬をすりつけ続けている。

（俺の顔を舐めたのも、コイツだろうな）

隼がのんびりと考えているが、よくよくその生物を見ると驚くべきモノがあった。

「これは羽根だよなあ？」 この生物の背中にある鳥の羽根のような物を優しくつまんだ。

その羽根の大きさだけを見るならばさほど大きくはないが、身体の大きさと比較して考えると中々のものだった。

犬とトカゲを混ぜたような顔をし、四足歩行で白いふさふさの毛を持っている。

そして大きな羽根が生えている生物。

まとめるとこういうことになる。

（……なんかドラゴンみたいだな…）

と冗談半分で思ったが、テトラがこの世界は隼が元いた世界の神

話ので出てくるような世界だと言っていたことを思い出した。

それなら、これもありえるのか、とそこで考えるのを止めた。

「よいしょつと」

と、隼はその生物のことを無視して立ち上がった。しかし、隼にはここがどんなところなのか検討もつかない。

「まあ、適当に動き回ってみるか…」

まずは人を探そうと隼は思っている。

そして街に行く。

野営などしたことない隼にとっては、山の中で夜に一人でいることは少し…いや、とても怖く、怯える姿が隼自身でも目に浮かぶ。

度胸がないな、と自虐すらしていた。

「ぴゃあー！」

そう考えながら歩き始めると、この生物も隼の横に並ぶようにして、ついてきた。

「しっ、しっ。こっち来んな！」

隼は手で追い払うようなジェスチャーを見せながら言った。

「ぴゅう？」

「あー、絶対にわかってないな。…まあ、当たり前か。

……なら、まずはコイツを引き離しておくか」

こんな小さな生物でも、どんな習性のある生物か分からないのだから、いきなり襲い掛かってくる可能性もある。

だから、隼は早くこの生物を引き離したかった。

そして、走って逃げようと隼が思っていた時だった。

近くの草木が、ガサガサと音をたてた。
隼はその方向に素早く振り向いた。

「ぶごおおお」

そしてそこからは奇妙な生物が出てきた。

一瞬、人間かと思ったがまったく違った。

その生物は二足歩行という点は人間と同じなのだが、他が大きく異なっていた。

皮膚は濃い緑色をしており、瞳の中は全て真っ黒、黒目しかない様だった。耳は人間のそれよりもはるかに尖っていた。

身長は一メートル程であろうが、筋肉の付き方が激しかった。

相撲取りよりも太い体つきなのにも関わらず、それが全て筋肉でできているように思える程の締まり具合だった。

そして、その手の中には太い木でできた丸太の様なものが驚掴みにされていた。

「ぶごおおお！」

そいつはそう叫びながら隼を再度睨み付け、襲い掛かってきた。
「クソッ！ 俺が何をしたんだよ！」

涙目になりながら全力疾走する男がそこにいた。

「はあ、はあ、はあ」

地面が柔らかく走りにくかったため、隼は十分以上走り続けて、ようやく先程の生物を撒けたようだった。

「ぴゃああー！」

「なっ！」

隼はあまりに本気で走っていたため、気付かなかったが、その声の主である小さなドラゴンのような生物は隼の背中にくっついていった。

そしてようやく息が整ってきた頃、近くから音が聞こえてきた。その音はまるで滝が流れ落ちているような音であった。

「……水…水」

今しがたの逃走で、すでに隼の喉は渴ききつていた。

水に飢えてた隼は一目散に音がどこから聞こえるのかを聞き分け、足を進め始めた。

小さな生物も付いてこようとするのだが、隼には振りほどく余力はなかった。

予想通り、歩いてすぐのところに滝があった。

その滝の下にある湖らしき所には、底が透けて見えるほどの綺麗な水があった。

隼は早速、勢い良く、大量に水を飲んだ。

水を飲み終わると、なぜか隼の身体は火照ってたまらなかった。それは走ったから暑い、というわけではない。その熱はすでに引いている。

しかし身体の内側からは止まることなく、熱が生まれ続けているようだった。

（まさか、この水、飲んだらやばいのか！？）

そう思っていると、とたんに身体の熱は消えていった。

本当はこのことについてもっと考えるべきだったのかもしれないが、そんな考えは消えた。

顔を上げた隼にはそれ以上の驚きがあったからである。

目の前には水浴びをしている女性がいた。

無論、水浴びをしているのだから裸である。

その女性は隼に背を向けていたため、どのような顔つきをしているかは分からないのだが、肌の色はとても白く、髪は灰色のものを腰まで真っ直ぐに伸ばしていた。

身長一六センチメートル程で、締まるべきところは締まっている女性だった。

「……って何してんだ、俺…これ、覗きだろ…」

隼は一人そう呟いた。しかし、思わぬ存在がその独り言に反応した。

「ぴゃああー!!」

もちろん、先程のドラゴンの様な生物の声である。

「えっ！……！」

「あっ！」

隼も水浴びをしている女性もその鳴き声に反応してその生物の方に振り返った。

隼はすぐに、もう一度振り返り、その女性の方を見た。

その女性はとても美しかった。

おそらく、隼ととの年齢の差はあまりないだろう。

そのため、顔も少しあどけなさが残っている。だから、かわいいと言う表現でも合っているような気はする。

しかし、やはり綺麗や美しいと言う言葉が相応しく思えた。

大きな灰色の目。

そして先程言ったようにあどけなさが多少残っているが、顔立ち
は全体的に整っていた。

隼は見惚れていた。

(……ヤバッ)

二人の目が合ってしまう。

それと同時に隼が我に帰った。

(どうする、どうするよ?)

いや、待て、落ち着け、俺。今この場面なら、逃げるべきか。いや、だめだ、だめだ。ここがどこかわからないんだぞ。それに、さっきの危なかった生物もいるんだ。謝るしかないな)

以上のことを隼はわずか数秒で考えた。

そして素早く、深く頭を下げて言った。

「す、すみません!!」

本当に覗こうなんて気はなくて

そのまま隼はチラリとその女性の方を見た。

勿論、下心などではなく、彼女がどんな反応をしているのか気になったからだ。

もしも、隼が思ってた以上に彼女が怒っていたのなら、さらに誠意を見せなければならぬ。また、彼女が恥ずかしがっているような反応をしているのなら、断りを入れてから一旦この場から退いて少し離れた所で落ち着くのを待った方が良くかもしれない、という考えがあつたからだ。

「えっ……！？　　白……！？」　　だが、彼女の反応は予想していないものだった。

彼女は何に対してなのかは分からないが、驚いていた。
何が白なんだろう、と隼が思い、この生物のことか、と納得した隼に彼女は話し掛けてきた。

「み、見た……？」

彼女は僅かに顔を赤らめて、可愛らしかったのだが、隼は何かその奥に別の感情を感じてたまらなかつた。

（こ、これはどう答えるのが正解なんだ？

見てない……とは言えないし、ほんの少しだけ、って言うべきか？
）

しかし隼は返答の方に思考が働き、一人苦悶していた。
そうしていると彼女はもう一度聞いてきた。

「見たの、ですか……？」

それと同時に彼女は何とも言えない表情に変わっていた。

「そっか……見たんだね……」

暗い、暗い、悲しみの表情であり、諦めの……負の表情。
その表情を隼は、まるで見慣れたものに感じ取れていた。
もしかしたら自分と同じように境遇の人なのかもしれないと直感

した。

そして、彼女はその表情のまま小さく呟いた。

「……………私の髪を……………」

「そっち!!?」

隼は思わず頭を上げてしまった。

「あつ……………」

「あつ……………」

二人の視線が再びぶつかった。

隼はなぜか、一度目の視線がぶつかった時は焦っただけだったのだが、二度目になると顔が赤くなっていた。

それに対して、彼女は負の感情しか見受けられない表情のままだった。

隼はもう一度、素早く頭を下げた。

「ご、ごめん。あ、あの……………えっと……………」

気が動転して何を言っているのか分からない隼に彼女はもう一言、言葉を掛けた。

「いや、気にしないでいいから早くどこかに行って」

その声はどこか、いや、一言一言が寂しく感じられた。

(…髪にコンプレックスでもあるのか?)

もしそうならば、ここは何も言わずに立ち去った方がよいのかもしれない。下手なことを言えば余計に相手を傷つけることになるからだ。

隼はそう思っている。

だけど

隼は立ち去る前に口を開いた。

どうしても彼女の顔が心の奥底に突き刺さるから。

「ごめんね。髪も見えたんだ」

出来る限りの優しい声で。

「だけど!!」

隼は声を張り上げた。

そして再び優しい声で。

「綺麗な髪だったよ」

そして、後ろを向いた。

本来なら隼はここまで頑張る必要がないのだが、彼女のあの悲しそうな顔が頭から離れなかったのだ。

だから頑張った。

そう　頑張ったのだ。

隼は昔の出来事のせいで、人と会話をするときに砕けた話し方で話そうとすると異様に緊張してしまう。

対人恐怖症と言っわけではないが、緊張する。いや、そうでもない。緊張とも少し違う。

だが、話せない。

だから、優しく話すことは隼にとってはとても大変で、苦しいことだった。

そして隼はそのまま去ろうとした。

だが、その時、

「待って!!」

後ろから声がした。

隼は耳を疑った。

なぜ、俺を引き止めるのだ、と。

彼女は続けてこう言った。

「もう一度……さっき言ったことをもう一度言って」
上手く聞き取れなかったのだろうか、ただそれだけか、と納得した。

隼は深呼吸をしてからもう一度、優しく言った。

「ごめん。髪も見えたけど、綺麗な髪だったね」

「……本気で言ってる？」

「ん？ ああ、本気だよ。真っ直ぐなめらかに伸びていて、それに灰色の髪って見たことなかったけど、とても綺麗だと思うよ」

彼女は数秒隼を見つめた。

そして、

「……っ！」

「えっと、俺なんかおかしいこと言ったかな？」

「………少し」

「えっ？」

「少しそこで待ってて」

彼女は隼の予想の右斜めはるか上空を通り抜ける言葉を言い残して、近くの岩場に向かった。

服を着るためであろう。

その際に隼が見た彼女の目には涙が浮かんでいた気がしたのは気のせいだろう。

これは失敗したのかな。何も言わなかった方がよかったのか、と隼は不安になってきた。

「ふうー」

隼は一息つく。

不安だろうが、少し疲れた。

だが、思った程疲れていなかったことと自分でも思いの外、スラスラと言葉が出てきたことは意外だった。

（髪が綺麗だと思ったのは本心だったからかな）
そこで隼は気付いた。

（あれ？ あの生物どこ行っただ？」

……まあ、いつか。巢にでも帰ったんだろ」

そして、待つこと十分と少々。

「ごめんなさい。お待たせしました」

ようやく彼女が姿を現した。

彼女は黒を基調とした半袖のカッターシャツと、こちらも同様に黒を基調とした短めのスカート。さらに赤いネクタイを着けていた。そのデザインこそ、隼は珍しいと思ったものの、雰囲気は隼の世界の制服その物だった。

「えっと、そうですね。まずは自己紹介を。私のことはリリーって呼んでください」

俺がリリーののことを眺めていると、彼女は恥ずかしそうに話し出した。

「俺は荒神隼と言います。よろしくお願いします、リリーさん」
やはり隼の口調は堅いものとなっていた。

「リリーでいいですよ」

「いえ、ですが…」

「『さん』禁止！」

「わ、分かりました。リリー」

隼がリリーの勢いに押されたような形で「リリー」と呼ぶこととなった。

「ふふっ」

突然、リリーが笑いだした。

隼はまるで頭上にクエスチョンマークがあるかのように思える、

不思議そうな顔をしていた。

「あつ！ ごめんなさいっ！！」

リリーは我に返ったように謝る。

「別にいいですけど、どうしました？」

「えっとね、堅っ苦しいのはなしで、もっと楽しめない？」

「リリーがそうする分はかまいませんが、俺は……」「だめ？」

リリーが上目遣いでお願する。

隼はその仕草に、ドキリとしてしまったが無理なことは無理であった。

「すみません。少し事情がありまして……だけどいつか、そうなれる様にしておきます」

「そっか。まあ、いいや」

そして、そのまま会話が続くのだが、これからはリリーが一気に隼に質問を投げ掛けた。

「だけどさっきと話し方変わってるのはどうして？」

あと、アラガミハヤト？　なんて呼べばいい？」

「えっと、隼でいいです。それと先程の話し方は、その方がリリーも落ち着くかな、と思って」

「ふうーん」

リリーは小悪魔的な笑みを浮かべて隼を見る。

そこで今度は隼がリリーをお願いをした。

「リリー。出会ったばかりなのに申し訳ないんだけど、少しお願いがあります。いいでしょうか？」

「なに？」

「近くの街に連れて行ってほしいのです」

「……」

隼はこの世界の情報収集という意味で街に行きたかった。

だから頼んだのだが、なぜかりりーは一瞬顔を強張らせた様に見えた。

しかし、それは一瞬だった。

すぐに彼女の表情は元に戻っていた。

隼もそれが一瞬だったため、あまり気に留めなかった。

見間違いだと思った。

「それはいいけど、ハヤトはどうして自分で行けないの？」

りりーから、考えていなかった質問が隼に問い掛けられた。

「……俺さ、かなりの田舎に暮らしてたんだよ。だから街に行きたかったんだけど、行き方が分からないからさ……」

よくもまあ、こんなに言葉を並べたな、と隼は自身で呆れていた。

「ふうーん。まあ、いつか」

りりーは納得こそしていなかったが、ありがたいことにそれ以上追求してこなかった。

……そのはずなのだが、りりーは隼の顔を見続けていた。

「えっと……なんですか？」「そのね、あつた時から気になってただけだね……その一白髪　はくはつ　って地毛？」

「……白髪？」

……誰が？」

「なに言ってるの？　自分の髪でしょ？」

隼はその言葉の意味が分からなかった。

それは、隼の髪は黒色であるから。

「りりー、鏡とか借りれます？」

「ん、はい」

そう言ってリリーはポケットから小さな手鏡を取り出した。
そして隼はそれを受け取った。

「 なっ!?! 」

そこにいたのは白髪の隼だった。

目や耳にかからないくらい長さや癖のない髪質は変わっていないかった。

しかし、それだけではなかった。

瞳の色も変わっていた。

翡翠色の目に。

隼はそのまま他の身体の部位も見た。

しかし幸いと言うべきなのか、変わっていたのは髪と瞳だけだった。

一七 センチメートルを越えた程の身長に少し細めな体型、良くも悪くもない顔の作り、と他は同じだった。

ただし顔は髪と瞳の色のせいで、今までとは異なった印象を受ける。

黒髪と黒目の時よりほんの僅かだが、顔つきが良い様に思える。

リリーが隼と出会った直後に「白」がどうこうと言っていたのは、隼のことだった。

（転移の影響か？）

隼は一つの可能性を考えたが、しかしそれは答えが無い。
とあるまぬけな神のせいだ。

だから隼は理由を求めるのではなく、事実を、結果のみを受け入れることにした。

リリーに、また嘘をついてしまった。

「そうです。これは地毛です……」

「そっか。じゃあ、よっぽど良い暮らしができていたんだろうね」

「??」

「どうしてですか？」

「だって『白』髪だよ!？」

『白』なんだよ!？」

リリーが怒った様に声を張り上げた。

しかし隼には、リリーがどうしてこんなにも「白」を強調しているのが分からない。

そもそも本当は今日、白髪になったばかりなのだから。

「リリー。別に『白』だからって別段、変わることはないですよ」
また嘘を言った。

「嘘っ!？」

どうせ私の髪も馬鹿にしてたんでしょ!?!？」

また髪だった。

リリーはなぜか髪に対して異常に反応する。

だが、彼女の目からは涙が流れていた。

理由は分からない。何を言ってあげればいいのかも分からない。
だけど彼女の必死さは隼に伝わる。

「俺にはリリーが何にそんな必死なのか分かりません」

「…えっ!？」

「だから教えて下さい」

沈黙が流れる。

そして

「じゃあさ、少し違うけどいい?」

何を、とは聞かない。

言ったのは一言。

いいですよ、と。

「わ、私の髪を触って、か、感想を言って」

リリーは今ほ泣けるせいもあるのか、真つ赤な顔で、二度目の上目遣い　今回はやろうと思ってやったのではないが　で言った。

隼はリリーの目の前に近寄り、正面から彼女の髪に手を通そうとする。

「　っ！」

リリーはその瞬間、ビクリとし、目を強く閉じた。

そして隼は無言で彼女の、リリーの髪に手を通した。

リリーの髪質は細くて柔らかく、スラリと手から髪の毛が流れた。

「綺麗」

隼は無駄な言葉の一切を省き、本当に伝えないことだけを言った。けれどリリーはその言葉を疑ってしまう。

「嘘っ!？」

「いいえ、綺麗です」

「灰色なんだよっ!?!？」

「綺麗な色です」

「……………」

「……………」

「……………認めてくれるの？」

「ええ、綺麗です」

「…本当に？」

「本当です」

「本当の本当に？」

「本当の本当です」

「
……」

そして、リリーが急に岩場の方へ走りだした。
だが、隼は追わない。
なぜならリリーの顔には涙とともに笑顔があったから。

そして、さらに十分後。

リリーが戻ってきた。

目が少し赤くなっているような気がするけど、それだけだ。

「ごめんね……」

「気にしないでいいですよ」

「ん、じゃあ早速街に送ってあげるよ」

戻ってきたリリーは元気だった。見ていて清々しかった。

「それはありがたいんですけど、どうやって？」

「そんなの決まっているでしょ」

魔具をつかうんだよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7349z/>

神の選択と抗う絆

2011年12月25日13時47分発行